

スペイン独立戦争と「国民意識」

——カタルーニャに関する最近の諸研究を中心に

立石博高

はじめに

「五月二日の事件は、スペインの全ての地方に筆舌に尽くし難い憤激を引き起こした。そして全ての地方は自主的にそれぞれに備えていた部隊を武装させて、祖国（パトリア）の独立を擁護するために、フランス勢力に対する蜂起を開始した。」

これは、フランコ独裁時代（一九三九～七五年）にスペインで版を重ねた『スペイン史概説』の一節である。⁽¹⁾五月二日の事件とは、一八〇八年のこの日、マドリードの民衆が、「フェルナンド七世万歳！ フランス人に死を！」と叫んで、同市に駐屯していたナポ

レオン派遣のミュラーの軍隊に対して蜂起したが、フランス軍によって過酷に鎮圧されたできごとを指している。上記の短い叙述から端的に窺えるように、伝統史学によってこの事件は、「スペイン独立戦争」、すなわち、フランス勢力によって祖国スペインを蹂躪された人々が自発的・自然発生的に愛国心から繰り広げた六年にわたる独立戦争の開始のできごととして描かれてきた。フランコ政権が人々の歴史意識を左右するのとに腐心していたことはヴィラールの鋭く指摘するところであるが、各地方が「宗教、国王、祖国万歳！」⁽²⁾をスローガンに掲げて、ナポレオンの軍隊と戦った「スペイン独立戦争」は、カトリック的伝統とスペイン

愛国主義の称揚にとって恰好の材料であったのである。

しかしながら、こうしたかたちで「スペイン独立戦争」の「国民的神話」化が行なわれたことは、逆に、スペインという近代国家が、二〇世紀に入ってもなお「国民国家」としての統合を十分に達成できなかったことの裏返しではないだろうか。⁽³⁾ 歴史的事実としての「スペイン独立戦争」は、近年の研究によってますますその複雑さと多様性が明らかにされてきている。⁽⁴⁾ ちなみに一九九二年五月に開かれた「五月二日」をめぐる国際会議では、この蜂起事件の自然発生的性格そのものが疑問に付されるばかりか、この事件と諸地方の蜂起の因果関係もあらためて問われている。⁽⁵⁾ さらに、この戦争はその過程を通じてますます「無神論者ナポレオン」に対する抵抗とカトリック擁護という宗教的性格を帯びていったとされるものの、⁽⁷⁾ 当初このマドリッド民衆の蜂起に対して教会当局や異端審問所は「卑しい民衆のけしからぬ騒擾」として弾劾する態度をとった事実が明らかにされるなど、⁽⁸⁾ ここでも神話の解体が大きく進展している。

こうした見直しの中で、フランコ体制の崩壊後、歴史的地域体ないし民族体(ナシオナリダー)と規定されるに至ったスペイン国内の諸地域、とくにカタルーニャが、「スペイン独立戦争」においてどのような「国民意識」を抱いたかということもまた問題にされている。⁽⁹⁾ 「国民意識」の高揚ということ自体をとりあげるにしても、それがいかなる階層といかなる地域の「国民」の意識であるのかを問うことが必要だからである。⁽¹⁰⁾ そこで、本稿は、紙幅の制約もあることからカタルーニャに絞って、最近の諸研究を検討するかたちをとりながら、カタルーニャの諸階層にとって反ナポレオンの戦争とはいったい如何なるものであったのかを考察したい。何故ならば、スペインのなかで経済的・社会的に重要な位置を占めたカタルーニャという地域体の独自の意識と運動の展開を見ていくことによって、近現代史におけるスペインという「国民国家」の形成のあり方とその性格を考える上での極めて重要な示唆が与えられると思われるからである。

一 「スペイン独立戦争」と「フランス人戦争」

一八〇八年から一八一四年にかけての戦争は、初めから「スペイン独立戦争」と呼ばれていたわけではないことは、フォンターナが明確に示している。⁽¹¹⁾ すなわち、同時代の人々は、スペインに侵入したフランス軍に対する蜂起であると同時に、カルロス四世とその寵臣ゴドイの専制政治に対して、王権を制約する新たな政体（コンステイトゥション）を樹立しようとしたのであり、「蜂起」、「戦争」という言葉の他に、とくに自由主義者たちは「スペイン革命」という言葉を使っていた。だがナポレオンによってフランスに止められていたフェルナンド七世が、一八一四年五月に絶対主義的な国王復帰を果たすと、この戦争はフランス勢力によって篡奪された王位を取り戻すためのナポレオンに対する戦い⁽¹²⁾にその意味を限定されて、「(反)ナポレオン戦争」という用語が好んで使われるようになった。しかし、スペイン国家が旧勢力との妥協による「改革」によって漸次的にアンシャン・レジームを廃棄して

「国民国家」を打ち立てていく過程で、「スペイン独立戦争」という用語が定着していった。すなわち、ナポレオン戦争は「スペイン国民意識」の覚醒と高揚のできごととして理解され、またそのように喧伝されたのである。この点は、スペイン・ナシヨナリズムと歴史学解釈の関係を追ったシルバーノらの研究も確認するところである。⁽¹²⁾ 以後、現在まで「スペイン独立戦争」の名称は——その歴史的意味の評価は別にして——、ほぼ共通に使われている。

いま、「ほぼ」と述べたのは、実はカタルーニャでは、近年になってますますフランス人に対抗する戦争として、「(反)フランス人戦争 (La Guerra del Francés)」という用語が使われるようになっていいるからである。フォンターナは、この言葉が「民衆のあいだに起源を持つ」と言うが、いつ頃から使われたのかには言及していない。いずれにしろ、二〇世紀に入ると、スペイン・ナシヨナリズムの「国民意識」に対抗する形で、カタルーニャ・ナシヨナリズムの「民族体意識」——カタルーニャが独自の「国民国家」を形成

しようとする意識ではないので、ここではとりあえずこのように区別しておく——の強調とともに、カタルーニャの歴史家が好んでこの言葉「フランス人戦争」を使用するようになったことは間違いない。フランコ時代にあつて社会経済史学の立場からマドリードの伝統史学を批判したビセンス・ビーベスもまた、晩年にはこの用語を使っている⁽¹³⁾。

もっとも、一九七〇年代までは、「スペイン独立戦争」の時期におけるカタルーニャの地域的特性が強調され、事件史としてはいくつかの実証的研究が現れる⁽¹⁴⁾ものの、カタルーニャ・ナシヨナリズムとの関わりでこの戦争の時期の人々の態度・意識を検証しようとする研究はほとんど見られない。おそらく、ソレ・トゥラに代表されるように、近代カタルーニャ主義は、マドリードの政治支配に対するカタルーニャ・ブルジョワジーの自己主張として出発したと捉えられ、それ以前のカタルーニャ主義は保守的伝統と結びつくものであったとする解釈が支配的であったからであろう⁽¹⁵⁾。つい最近のカタルーニャ主義的な概説書のなかでも、

「フランス人に対する戦いは、(スペインと)一体的であり、カデイス議会が召集されて最初の憲法が制定されたとき、カタルーニャの古くからの諸権利を擁護することもなかった」といった記述がなされている⁽¹⁶⁾。

いわば階級的視点に立ったカタルーニャ主義の分析に対しては、ククルイが歴史的伝統を重視する立場から批判を加えているが、「スペイン独立戦争」をカタルーニャの民族意識の形成のための画期と見る主張は、近年、有力になっている。バルセルスは、この戦争がアンシャン・レジームの崩壊によってだけでなく、「カタルーニャ人の特殊な集団意識の発展」にとって基本的エピソードであったと述べる⁽¹⁸⁾。一方、ブーチは、この戦争のあいだに「カタルーニャ主義の数々の表明」が見られるとして、「反フランスという意味でのスペインの一体性があつたとしても、同時にカタルーニャの差異と独自性、そして自治を要求する動きも存在したと主張する⁽¹⁹⁾。

こうして、「スペイン独立戦争」から「フランス人戦争」へと名称が変わることによって、カタルーニャ主

義の表明が重視されることになったが、その内実をきちんと検討しておかなければこうした解釈もまた、カタルーニャにとっての「歴史的神話」となってしまいうだろう。その論拠とされるものをもう少し詳しく見よう。

二 「カタルーニャ主義」の表明

まずは、簡単に「フランス人戦争」の経過を追いたい。⁽²⁰⁾ゴドイとフランス政府のあいだに結ばれたフォンテーヌブロー条約にもとづいて、ポルトガルへ進軍するという名目でフランス軍がカタルーニャに入ったのは一八〇八年二月九日で、バルセローナには同月一日に駐屯を始めるが、二九日には突然シウタデリヤとモンジュイックの要衝を占拠して、事実上同市の占領を実現した。市当局および方面軍司令官はこれに逆らうことなく治安の維持に努めるに過ぎない。三月にはアランフェス暴動が起こってカルロス四世の退位と寵臣ゴドイの失脚、そしてフェルナンド七世の即位が行なわれるが、五月から六月にかけて、ナポレオンは、

新たに自分の兄ジョゼフをホセ一世としてスペイン国王に即位させ、スペインのフランスへの従属さらには併合の意図を明白にした。引き続きバルセローナは、一八一四年春までフランス勢力の下におかれるが、⁽²¹⁾占領を免れていた諸都市では、五月二八日に結成されたリエイダのそれを皮切りに、抵抗組織として地区評議会が結成され、やがて六月一八日には地区評議会の結集体としてカタルーニャ最高評議会がつくられた。しかし、戦闘はフランス勢力に有利に展開し、カタルーニャ最高評議会は各地を転々とせざるを得ず、一八〇九年一二月のジローナ陥落に次いで、リエイダ、トルトザ、タラゴナも降伏し、一八一二年にロシア遠征のためにナポレオン軍そのものが動揺をきたすまでは、有効な軍事的反撃を行なうことができなかった。その後は、イギリス軍の支援を受けてスペイン正規軍が活動を盛り返し、ゲリラ戦も活発化するなかで、フランス勢力の支配域は次第に縮小していき、やがてその最終的撤退を迎えた。なお、一八一二年に制定された憲法の規定に沿って、同年一月カタルーニャ地方議会

(ディプタシオ・プロビンシアル)がつくられ、カタルーニャ最高評議会は解散した。一八一四年五月のフェルナンド七世の復位によってこの制度も廃止されたことは言うまでもない。

さて、この時期のカタルーニャ主義を強調する歴史家が、フランス占領下の地域での親フランス派の人々の動きに注目している点は興味深い。なかでも一八一〇年、オジュロー元帥のもとで進められた行政改革を支えたトマス・ブーチの思想が注目されており、彼が中世カタルーニャの栄光と独自の伝統を擁護し、「カタルーニャ語は、カステイリヤ語(スペイン語)よりもずっと豊かで甘く、表現も豊富で思慮深いものだ」として、ナポレオン法典をカタルーニャ語に訳すことを積極的に進言したことが明らかにされている。そして、こうした言動を受けて占領行政に携わったフランス人は、「カタルーニャ人は、(カタルーニャ人としての)民族的誇りをもっており、彼らはスペイン人より勝っていると思っている。彼らのカステイリヤ人に対する怒りと憎しみは、表現の仕様もないほどで

ある」といったことを本国へ報告したことが確認されている。⁽²³⁾ また、フランス支配地域では、カタルーニャ語で書かれた新聞が発行されており、カタルーニャ語の進捗が紛れもない事実とされる。⁽²⁴⁾

このことは確かに、スペイン王位継承戦争(一七〇一〜一四年)で地域諸特権(フェロス)を廃止されたカタルーニャで、独自の政体と言語を復活させようとする意識が少なくとも一部の人々によって抱かれ続けられており、フランス勢力がこうした意識を利用しようとしたことを示す。しかしながら、ナポレオン側のこうしたカタルーニャ意識への譲歩は、やがて一八一二年二月に行なわれた、スペインから切り離してカタルーニャをフランス内の四つの県とする領土併合政策の一貫であったことは間違いない。⁽²⁵⁾ そしてこの際に、何故、反フランス意識が表明されなかったのかを問う必要があるだろう。一六四〇年代のカタルーニャの反乱では、反スペイン的カタルーニャ意識とカタルーニャ政体の独自性の強調は、社会的支配層にとっては民衆反乱が社会反乱に転化することを防ぐための道具であった。⁽²⁶⁾

そうした支配層——エリオットの言葉では「政治的国民」——が主張するカタルーニャ民族体の主張は、どこまで民衆レベルでの民族体意識と重なるのか、我々は十分に注意する必要があるのではないか。

そのことは、反ナポレオン側地域でのさまざまな表明についても言えることである。一八一三年に入ってカデイス議会において異端審問制度の廃止が問題となつたとき、この廃止に反対するカタルーニャ選出の議員たちの多数は、議論の中断を求める。その論拠というのは、カタルーニャは伝統的に異端審問制度を支持しているのです、予めカタルーニャに戻って賛否を問う必要があるというものであった。これは、まさにアンシャン・レジームの利害の擁護とカタルーニャ地域体の独自性の主張とが結びついたものであって、このようなかたちでのカタルーニャ主義の表明のあったことも我々は考慮にいれなければならないのである。⁽²⁷⁾ 一方、同じようにカデイス議会の議員となつた穏健派のカプマーニは、「カタルーニャによって、あるいはガリシアによって選出された議員はいても、カタルーニャの、

あるいはガリシアの議員はいない」と述べて、議員が「国民」の代表であつて、「あれこれの地方」の代表ではないことを主張している。⁽²⁸⁾ しかし他方で彼は、「これら（アラゴン人、バレンシア人、ムルシア人等々）の小さな諸国民（naciones）から偉大な国民（nación）が構成される」として、スペインの各地方がもつそれぞれの一体性が尊重されねばならないとする。⁽²⁹⁾

三 民衆と戦争

各地の民衆の蜂起について精力的に研究を進めているモリネル・ブラダは、市町村の評議会の結成は、一方では、反フランスの抵抗を組織するためであるが——一様に「宗教、国王、祖国」をスローガンとして掲げている——、他方では、既存の秩序が動揺する中で民衆の動きをそうした抵抗へと嚮導することによって社会秩序の温存を図るためであったことを明らかにしている。⁽³⁰⁾ 例えば、最初に結成されたリエイダの地区評議會は、全ての諸身分の代表二九人によって構成されリエイダ司教を議長とした。そして、「侵略者のた

めには鑑一文渡さない」と述べてフランス勢力に対する抵抗を毅然と表明したが、同時に、「騒擾と騒乱は無政府状態を誘うものである」として民衆の当局への服従と公安秩序の維持を強く要求した。さらに、カタルーニャ最高評議会も、当初から、領主的諸貢租を含めてアンシャン・レジームの諸権利と財産を擁護する立場に立っており、その結成後まもなくして治安を維持し租税を徴収するために各地区に一五人規模の兵隊による警備を命じている。このように、抵抗組織Ⅱ評議会と民衆とのあいだには利害対立と社会矛盾が含まれていたことに注意しなければならない。

また、モリネル・ブラダは、こうした状況のなかで「カタルーニャ主義」がスペイン正規軍への徴兵(キンタス)への反対として表明されていると指摘する。すなわち、一八〇九年一月頃に流布した、「カタルーニャの民衆よ、武器をとろう。我々の起こす轟音は、スペイン人将校や高慢なフランス人を脅えさせるだろう」と述べた「カタルーニャの虎」の署名のあるパンフレット類に注目して、敗北を重ねるスペイン軍隊に

失望して、かつての伝統であったカタルーニャ民衆の武装を要求することを表明したのだと捉えている⁽³¹⁾。そして、民衆と正規軍の関係が悪化し、軍隊に徴兵されたカタルーニャ人の脱走が甚だしかったことを、カタルーニャの独自性の主張のひとつの現れとみるのである⁽³²⁾。

しかしながら、民衆の忌避は、スペイン正規軍への徴兵だけにとどまらなかったことをカナレスの研究は指摘する⁽³³⁾。彼は、フランス勢力に対する戦いの「一体性」、戦争の集団的偉業といったことを疑問視して、兵隊の徴募と免除、脱走などの具体的数字を追うという作業を進めるが、正規軍からの脱走が場合によっては部隊員数の三割にものぼっていたという事実を明らかにする一方、カタルーニャ人自身が指揮した伝統的な民兵隊(ミケレット)、予備隊、そしてカタルーニャの抵抗の「神話」に常に言及される自警団(ソメテント)の場合にも、脱走は一般的現象であったことを指摘する。従って、民衆の兵役拒否という現象があつて、それに重なるかたちで、スペイン王位継承戦争で失われ

たカタルーニャの伝統——カステイリヤの軍隊には徴募されないという特権——の回復要求が現れたと解すべきことを、このことは示唆しているのである。

おわりに

六年間にわたる「スペイン独立戦争」の意味は、のちの歴史学によって、あるいは「歴史的記憶」を現在に利用しようとする人々によって、さまざまに解釈されてきた。「独立」という名称そのものが「スペイン国民意識」の高揚の意図と関わって定着していったのである。さらに、「スペイン国民意識」に反発するカタルーニャでは、「フランス人戦争」という用語を馴染みあるものにしていく。いずれにせよ、この戦争は、アンシャン・レジームという社会矛盾をかかえつつ生活する人々の生活圏に、名目はいかなるものであれフランスという外国の軍隊が侵入して、その生活を脅かすというできごとであったことを忘れてはならない。当然のことながら、人々の抱く意識は、それぞれの社会階層的立場に応じて、反フランス的であったり、反領主

制的であったり、反徴兵的であったり、反カステイリヤ的——カタルーニャの一部では——であったりした。そうした諸意識の錯綜を統合するもの、それが、さしあたり「宗教、国王、祖国」であったのだろうか。我々は、六年間の「戦争の悲惨」の実態に史料的に迫っていく必要があるだろう。⁽³⁴⁾

(1) Asián Peña, José L., *Manual de Historia de España*, 9ª edición, Barcelona, 1967, p. 255.

(2) Vilar, Pierre, "Prólogo a la nueva edición española", de su *Historia de España*, 6ª edición renovada y puesta al día, Barcelona, 1978, pp. 8-10.

(3) この点に関して、ウイラルの指摘が参考になる。彼は二〇世紀スペインの抱えた構造的不均衡の一つとして地域的不均衡をあげている。Id., *La Guerre d'Espagne (1936-1939)*, Paris, 1986, pp. 14-21 (邦訳『スペイン内戦』白水社、一九九三年、二二—三〇頁)を参照。

(4) その全体的問題状況については、Morange, Claude, "La 'Révolution espagnole' de 1808 à 1814. Histoire et Écritures", dans *La Révolution française*

et son 'public' en Espagne entre 1808 et 1814, Paris, 1989, pp. 13-124 が参考となる。なお、「スペイン独立戦争」の時期にカデイスでは最初の近代議会が開かれて一八一二年憲法が制定される。このスペイン自由主義の動きについても従来とは異なって、その限界性を見ようとする評価が現れている。この点に関しては、拙稿「スペインの自由主義とカデイス議会——『出版の自由』をめぐって」(遅塚忠躬他編『フランス革命とヨーロッパ近代』同文館出版、一九九三年一月刊行予定)所収)を参照された。この戦争の全体の経過については、拙稿「炎のイニリマ半島——スペイン独立戦争とウエリントン」志垣嘉夫編『ナポレオンの戦争』(講談社、一九八四年)所収)で概観した。最近の優れた通史的成果に、Dufour, Gérard, *La Guerra de la Independencia*, Madrid, 1989 をあげ。この時期を含めて「スペインのマンチャン・ジョーム」の時期をめぐる諸問題を文献として扱ったのは、Aymes, Jean-René, “España en movimiento (1766-1814). Ensayo bibliográfico”, en *La Revolución francesa y el mundo ibérico*, Madrid, 1989, pp. 19-159 を参照。(c) Espadas Burgos, Manuel, “El levantamiento del Dos de Mayo”, en *Actas del Congreso Internacional El Dos de Mayo y sus Precedentes*, Madrid, 1992, pp.

409-417.

(d) ロンガレス・アロンソは、「五月二日」事件がのちに神話化された大きな理由として、それがスペインの中央部の「首都」で起こった事件であったということを描いている。と同時に、この事件からアストゥリアス地方評議会の反フランス宣戦布告まで三週間以上が経過しており、中央から地方への抵抗の波及という図式は、事実経過として誤りだとしている。Longares Alonso, Jesús, “El 2 de mayo y su relación con la guerra y el levantamiento de las provincias”, en *Ibid.*, pp. 425-436. その一方で、モラレス・モヤは「バルセロナ・オリンピックに表れたカタルーニャ・ナシヨナリズムに対抗して、いま現在、全国民的な「歴史的追憶の場」としての「五月二日」の意義を強調した」とする旨の発言をこぼしている。Morales Moya, Antonio, “La Historiografía sobre el Dos de Mayo”, en *Ibid.*, pp. 319-328. とくに p. 327 を参照。自治州体制となつてきたお民族主義問題を抱える多民族・多言語国家スペインの苦悩を表す言葉として用いようか。(e) この点に関しては、Moragne, *op. cit.*, pp. 51-55; Moliner Prada, Antonio, “La moderación de la Revolución española de 1808”, dans *Les Révolutions Ibériques et Ibero-Américaines à l'aube du XIXe*

siècle, Paris, 1991, pp. 127-138 の強調するところの
489°。

- (8) Dufour, G., "La Iglesia y el Dos de Mayo", en *Actas del Congreso Internacional*....., pp. 539-544. さらにデュフルは、かなりの聖職者が親フランス側に立ったことなどを論拠にして、この戦争の全体に「つとめ、聖職者の役割を「宗教的感情」を過度に強調するのを戒め、その一方で、戦闘の地方的性格からして、諸地方の「地方主義的感情」の強さを指摘してゐる。Id., "Pourquoi les espagnols prirent-ils les armes contre Napoléon?", *Les Espagnols et Napoléon*, Aix-en-Provence, 1984, pp. 317-334. だが、聖職者の動向の再検討がたまたま、これまで主張されてきた反フランス戦争における民衆の「宗教感情」の強さの見直しにつながるのかは疑問である。
- (9) 最近の研究として、Molner Prada, A., "Las repercusiones del 2 de Mayo en Cataluña", en *Actas del Congreso Internacional*....., pp. 437-454.
- (10) すでに「国民」「祖国」といった意識の錯綜については、ヴィラルールの問題提起がある。Vilar, P., "Patrie et nation dans la vocabulaire de la guerre d'indépendance espagnole", *Annales Historiques de la Révolution Française*, oct.-déc. 1971, pp. 503-

534 (カタネーニャ語訳) *Assaigs sobre la Catalunya del segle XVIII*, Barcelona, 1973, pp. 133-171 の所収)。また、フランス勢力と占領者に対するスペイン人への被占領者の抵抗と「つとめ、抵抗と闘う」「体性」の背後に諸階層は、それぞれにさまざまなイメーヂを描じていたことをヴィラルールは指摘する。Id., "Quelques aspects de l'occupation et de la résistance en Espagne en 1794 et au temps de Napoléon", dans *Occupants-Occupés. 1792-1815*, Bruxelles, 1968, pp. 221-252 (カタネーニャ語訳) *Assaigs*....., pp. 93-131 の所収)。彼によれば、「政治的に自覚した積極的少数者はナポレオンとマンシヤン・レジームに対して同時に戦った。熱狂的な大衆は、ナポレオンが突然の新しい体制を代表しているが故にナポレオンに対して戦った。フランス勢力の行なう徴用によって彼らの憎しみと愛国心は駆り立てられ、二つの異なる特徴の政治的希望はますます大きくなった。そして、社会の諸階層に通常見られるイデオロギー的傾向をもとに人々のさまざまな行動選択を分類することは必ずしも容易ではなからぬ。」(*Assaigs*....., p. 121)

(11) Fontana, Josep, "Guerra del Francès, guerra de la Independència, guerra napoleònica: ¿qüestió de noms o de conceptes?", *L'Avenc*, núm. 113, 1988, pp.

22-25.

- (21) Cirujano Martín, Paloma, et al., *Historiografía y nacionalismo español, 1834-1868*, Madrid, 1985, pp. 190-194.
- (22) Fontana, *op. cit.*, p. 24.
- (23) 平野岳太郎『Carrera Pujal, Jaime, *Historia política de Cataluña en el siglo XIX*, Tomo 1, *La guerra de la Independencia*, Barcelona, 1957: Mercader i Ribá, Joan, *Catalunya i l'imperi napoleònic*, Barcelona, 1978.
- (24) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burgesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. 平野一太郎・平野三太郎の起原の概念に關して Balcells, Albert, *El nacionalismo catalán*, Madrid, 1991, pp. 18-19 を參照。
- (25) Cadena, Josep M., *505 fets bàsics de Catalunya*, Barcelona, 1989, pp. 115-116.
- (26) Cucurull, F., *Orígens i evolució del federalisme català*, Barcelona, 1970. 1) 6 頁に關して Balcells, *op. cit.*, pp. 19-20 を參照。
- (27) Balcells, A., *Cataluña contemporánea, I, Siglo XIX*, Madrid, 1977, p. 16.
- (28) Puig, Lluís Maria de, "Invasió napoleònica i

questió nacional a Catalunya", dins *La invasió napoleònica*, Bellaterra, 1981, pp. 55-79.

- (29) 漢語をその下に置いた、右の二つは、大體に「*La fi de l'antic règim i la industrialització (1787-1868)*」, Barcelona, 1988 (Volum V de *Historia de Catalunya dirigida per Pierre Vilar*), pp. 145-181 を參照した。
- (30) 平野一太郎の漢語に「*Merceder i Ribá, J., Barcelona durante la ocupación francesa (1808-1814)*」, Madrid 1949 を參照。
- (31) Sarrion i Gualda, Josep, *La Diputació provincial de Catalunya sota la Constitució de Cadix (1812-1814 i 1820-1822)*, Barcelona, 1991 を入手した。本報では採用するに附かなかった。カテドリック體の國史のこの種の學識は、限の幾かに止まった。
- (32) Puig, *op. cit.*, pp. 69-71.
- (33) *Ibid.*, p. 72.
- (34) Fontana, *op. cit.*, pp. 169-170 を參照。
- (35) Elliott, John H., "Revolution and Continuity in Early Modern Europe", *Past and Present*, no. 42, 1969, pp. 35-56 を參照。
- (36) Roura i Aulinas, Lluís, "Hi hagué algun

protocatalanisme polític a Cadis?”, *L’Avenç*, núm. 113, 1988, pp. 32-37.

(87) *Ibid.*, p. 34.

(88) Fontana, *op. cit.*, p. 180 に所収。カトローニの語彙に「カタル」Grau, Ramon i López, Mariana, “Antoni de Capmany: el primer model del pensament polític català modern”, dins *El pensament polític català del segle XVIII a mitjan segle XX*, Barcelona, 1988, pp. 13-40 を参照。

(89) Moliner Prada, Antonio, “Movimientos populares en Cataluña durante la guerra de la Independencia”, *Estudios de Historia Social*, 22-23, 1982, pp. 23-40. この論文を参照して彼の「戦の壮絶さ」Moliner i Prada, Antoni, *La Catalunya resistent a la dominació francesa (1808-1812)*, Barcelona, 1989 に纏められた。本稿ではこの書物を利用する。

(90) *Ibid.*, pp. 53-57.

(91) *Ibid.*, pp. 60-61, 91-97; Id., “Las repercusiones ……”, p. 452.

(92) Canales, Esteban, “Patriotismo y deserción durante la guerra de la Independencia en Cataluña”, *Revista Portuguesa de História*, tomo XXIII, 1987, pp. 271-300; Id., “La resistencia antifrancesa a Catalunya: estudi d’alguns comportaments”, *L’Avenç*, núm. 113, 1988, pp. 26-31.

(93) 「スペイン独立戦争」に従軍した人々の回想録に記述されているのは、戦時の人々の日記類から得られたものである。それらは、実態に接近するべきの貴重な史料となる。例として、Id., “Una visió més real de la Guerra del Francès: la història de Bràfim d’en Bosch i Cardellach”, *Recerques*, 21, 1988, pp. 7-49; Simon i Tarrés, Antoni, “La guerra del Francès segons les memòries d’un hisendat del corregiment de Girona”, *L’Avenç*, núm. 113, 1988, pp. 42-47.

(東京外国語大学助教授)